The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『しのびね物語』論 : 現存本から古本へのまなざし
Author(s)	伊井, 春樹
Citation	詞林. 1999, 25, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67426
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『しのびね物語』論

―現存本から古本へのまなざし―

伊井　春樹

一　嵯峨での出会い

『しのびね物語』[1]の事件の発端は、男主人公中納言（この折はまだ少将だが、以下最終官位で呼ぶことにする）の系譜的な説明がなされた後、

十月ばかりのことなるに、少将は、嵯峨のわたりの紅葉ご覧ありて、小倉の裾など心静かにながめたまふほどに、いとよしある小柴垣のうちに、耳慣れぬほどの琴の音、響き合ひて聞こゆ（上巻）。

と、紅葉を求めての嵯峨、小倉を逍遥しての途次、ふと琴の音を耳にしたことから語り始められる。紅葉狩りは単独の行動なのか、一夜過ごした「明けがた近くなる」ころ、「殿より御迎へのものども参りつどひて、夜より尋ねたてまつる由申して」と、中納言の行方を探しまわったと報告するものの、嵯峨の小倉山の麓にある小柴垣の屋敷にとどまっていたことをどうして知ったのか、現存本では何も語られない。大勢の迎えの使者の訪れ、それによって屋敷の尼上は、貴公子が「今日明日都にめでののしられたまふ、大臣殿の四位の少将殿」ではないかとの前夜の推測は、まさにそうだったと確信するにいたる。女御殿が退出しているため、「とくとく帰りおはすべき由などさまざまに、ことごとしげに申しなす」との使者の口上には、父大臣の強い意向が示されており、さらに「母上の御消息」も付されていたというのだから、中納言の行方不明の報は都で大騒動をひきおこし、一晩中必死の探索がなされたはずである。

あわただしいしのびねの姫君のもとからの帰京、早速両親のもとに参上すると、「殿、母上など、久しく籠りおはしつるに、めづらしくおぼしたるさまのあはれにおぼゆるに」と、中納言の顔を見てやっと安堵の思いをする。「久しく籠りおはしつる」は、「久々に里下りの女御を迎えてよろこんでおられる」[2]と解釈するむきもありはするが、文脈からすると中納言が「久しく籠」っていたため会えな

かったとすべきで、両親の「めづらしくおぼしたるさま」を目にするにつけ、それほどまでに我が身を思いやってくれるのを知り、中納言は今さらながら感動をおぼえたというのである。狭衣中将に対して、父関白は「今日はまだ見たてまつりたまはざりつればにや、めづらしきにほひ添ひたまへる心地して、うち笑みてぞつくづくとまぼられさせたまふ」（『狭衣物語』巻一）と、たとえ一日たりとも顔を会わさないと心の落ち着かないように、中納言の両親とて鐘愛する思いに変わりはない。それが「久しく」中納言を見ていないとなると、なおさら恋いしさはつのってくるはずで、大騒ぎをし、夜明けまでかかって行く方を調べ、大挙して嵯峨まで出迎えたのも、そのような背景を読みとることができそうである。

それでは、両親とも会わないまま、中納言が宮中に「久しく籠」っていたとは、どのような事情があったのであろうか。後にしのびねの姫君と離別する運命の契機ともなった宮中での物忌が、この折もあったに違いなく、「外へも出でず籠りたまふべきなれば」とするように、彼はまさに「久しく籠」っていたのである。中納言はしのびねの姫君の宿を訪れるとその姿はなく、書き残された歌を見て「身も熱きまで泣きこがれ」、呆然として「いとどかきくれてひきかづきて臥し」ているところに、

殿よりは、「今日までのもの忌みなれば、出でたまふらむ。とく渡りたまへ」と御使ひあれば、（中巻）

との召しがあったように、物語の冒頭でも、両親はすぐさま顔を見たいとの思いに駆られて心待ちにしていたものの、彼は宮中から父邸に直行せず、嵯峨に赴いてしまったことになる。

『堤中納言物語』のような短編物語であれば、場面の前後関係や設定の必然性は語られることなく、もっぱら事件の推移の意外性やおもしろさに焦点が合わされることになる。『しのびね物語』などになると、平安末期の物語などに比すと短いとはいえ、それなりの結構の整った作品といえよう。今日一般的に定着している、「その筋を主人公中心の筋書にと簡略化して行った傾向が見える」[3]との評価からすると、『古本しのびね』はさらに長い中編物語だったと考えられ、それだとなおさら、中納言の出自の紹介がすむと、紅葉見物とはいいながら、いきなり嵯峨の地に登場し、しのびねの姫君をどうしてかいま見するにいたったのか、現存本ではそのなりゆきの必然性が語られないだけに、いささかとまどいをおぼえてしまう。強引とも思える姫君との逢瀬、都から権力を見せつけるような仰々しい出迎え、平安朝物語で醸成されてきた、「さて世にありと人に知られず、さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひの外にらうたげならん人の閉ぢられたらんこそ限りなくめづらしくはおぼえめ」（『源氏物語』帚木）とする、身分高き男が

下の品の女を発見し、その後の二人の運命がさまざまに翻弄されながら展開していく物語のパターンに即しているとはいえ、前提としての説明はあまりにも寡黙で語られなさすぎる。俊蔭女と兼雅のように、苦難の後に再会して幸せを得る場合もあれば、飛鳥井姫君とこの世では会えないまま涙するしかなかった狭衣大将の悲恋、身分の差からではなく、偶発的な出会いの恋の結末としては、出家してしまう女二宮、さらに末尾欠巻部分に存在していたと思われる寝覚上の尼姿、いずれも男君とはこの世では結ばれることがない。このように、かいま見したり、ふと知り合った女性との恋は、物語において大きな意味を持ち、さまざまなヴァリエーションのもとに語られ、男女のいずれかが出家したり死を迎えることで終末する。しかも、そこには必ずといってよいほど秘密の子が生まれ、どちらかに引き取られて成長し、後日譚的な物語がさらに継続していくことになる。

現存本の『しのびね物語』で突如として語られる、中納言の嵯峨でのしのびねの姫君のかいま見は、あまりにも情報量が乏しいだけに、読者はそれまでの物語の方法を駆使し、これが今後どのような意味を持つのか、想像力をかきたてながら空白部分を埋めようとするであろう。いわば作者もそれによりかかっているのであり、いまさら過去の物語の同じようなパターンは説明するまでもなく、「くだくだしければ例の漏らしつ」といわんばかりに、読み手にゆだねてしまうのだが、私はかつてこれを「物語共有圏[4]」と称したことがある。しかし、この方法は短編物語には効果的であっても、『しのびね物語』ほどの中編になるとかえって読者に不審を抱かしかねない。ただ、改作者にとってみれば、中納言としのびねの姫君との出会い、別離、再会、出家、といった「忍び音」の悲劇を主眼にしてまとめようとしただけに、それ以外の叙述はできるだけ簡略化しようとする意図が存したのではないかと思う。

王朝文化を背景にしたこの物語において、中納言が随身を連れているとはいえ、単独行動を起こして嵯峨に紅葉を見に行くことはあまり考えられない。残された記録は限られているとはいえ、例えば『小右記』の長保元年（九九九）九月十二日条には、

源相公（俊賢）談云、昨左府（道長）遊覧嵯峨大井、即帰参女院、有競馬事、其後読和歌、左衛門督誠信、右衛門督公任追従、

と、道長一行が嵯峨から大井川に遊覧し、都に帰って和歌を詠んだことが記される。さらに詳しくは同日の『権記』にあり、ここでは「各調餌袋破子、先到大覚寺・滝殿・栖霞殿、次丞相（頼光）騎馬、以下従之、到大堰河畔、式部権大夫（匡衡）依丞相命和歌題、云、処々尋紅葉、次帰相府馬場、読和歌、初到滝殿、右金吾詠云、滝音能、絶弓久成奴

礼東、名社流弓、猶聞計礼」と、この折に詠まれたのが、公任の名歌とされる「滝の音はたえてひさしくなりぬれどなこそ流れてなほきこえけれ」であったという。歌題が「処々尋紅葉」であったとするように、この日の遊覧の目的は紅葉見物であり、大覚寺から大井河畔に到るという、まさに現代の観光コースと同じ道をたどる。『御堂関白記』の同日条も「出西山辺、見紅葉」とし、嵯峨から大井川を含む西山は紅葉の名所であったことを記しており、『夜の寝覚』でも、寝覚の上が出家を決意して父入道の広沢（西山）に身を寄せていたものの、男君の説得により帰京することになった場面で、「紅葉の色々おもしろく、錦をひけるやうなる山のかた」（巻五）と描写する。

大覚寺から大井川の一帯が嵯峨野であり、とりわけ小倉山の山麓のあたりは平安貴族の遊楽の地でもあったのを思うと、中納言がしのびねの姫君を見いだした「小倉の裾」は、山里離れた隠棲の地などではなかった。『小右記』の長保元年九月十日に「密々向嵯峨奔、休慰心情、於大井食、聊有和歌興、乗月帰」といった、これは実資の単独行動なのであろうか、密かに嵯峨に赴き、心情を休め、和歌を詠じ、月明かりのもと帰京したという、珍しい記録を目にするものの、大半は集団としての嵯峨行きである。『左経記』寛仁元年（一〇一七）十月九日には「人々会合左近府、被向大井、…入夜帰京、于時素月浮波、紅葉随嵐、各有余興」と、食料をもっての舟遊びと紅葉見物、『水左記』の承暦三年（一〇七九）十一月四日も「此日殿上逍遥云々、…先参野宮、次向大井、右近将監為章儲船云々、又有和歌事云々」[5]などと、このような例はいくらも拾い出すことができる。すると、中納言も殿上人たちと嵯峨へ紅葉を賞翫する遊覧に赴き、ふとしたことから小倉の裾で姫君の存在を知ったというなりゆきが想像できなくはない。

二　尼君から母上へ

中納言は物忌みによって宮中に参籠、それが明けて帰邸するのを楽しみにしていた両親は、同じく籠っていた人々と嵯峨野に出かけたことを知り、いささか落胆したものの、それでも夕暮時にはと、心待ちにしていたにもかかわらず、一向に姿を見せないではないか。心配のあまり人々に問い合わせたところ、嵯峨からの帰途、中納言はしばらくこちらにとどまる由を告げて別れたとの報、あわてた両親はすぐさま迎えを遣わし、やっと所在を確かめたのがその夜明けだったということになる。現存本では中納言の単独行動とし、随身を供にしての嵯峨への紅葉見物としているが、多くの記録が存するように、もとは人々とともに赴き、そこでかいま見した姫君が心にとまり、『うつほ物語』の若小君が賀茂参詣からの帰途、一人後れて昼見た俊

蔭女と出会ったように、彼もそれとなくとどまる理由を口実にして、都へは帰らなかったのかも知れない。このような背景を復元することによって、中納言が嵯峨に赴いたこと、両親が大騒ぎしてその行方を探し、手紙までもたらして連れ帰り、「久しく籠りおはしつるに、めづらしくおぼしたるさま」といった喜びにいたる事情も、はじめて納得できてくるといえよう。

古本を改作するにあたって、すでに言及されているように、基本的な筋や内容の変更はしなかったようで、『無名草子』で「今隠れ蓑といふものをし出だす人のはべれかし」と、新『隠れ蓑物語』の出現を待望する言辞が表明され、そこでの改作の基本は当代の評価に耐えうる「言葉遣ひ」と「歌」が判断の基準になっていたが、[6]『しのびね物語』の場合も王朝物語の香気を漂わせながら、よりテーマの悲劇性を高め、スピーディーな展開が求められたはずである。そうなると、中納言と姫君との出会いにいたる悠長な内容は大幅にカットされ、物語にとっては不可欠な逢瀬と不本意な離別の構造がいきなり提示される結果になってくるのである。現存本の『しのびね物語』にあっては、俊蔭女、飛鳥井女君、寝覚の上、さらには『浜松中納言物語』の唐后や吉野の姫君などと、男君とのそれぞれの結びつきにいたる経緯が、必然性をもって長々と語られていたのは、もはや既成の事実として読者の想像力に委ねられ、それを前提にして中納言の嵯峨でのかいま見から語り始めるという、このあたり大胆な梗概化がなされたのだと思う。

中納言は琴の音に誘われ、随身に様子をうかがわせ、女房たちの「姫君」と呼ぶことばを耳にして一層関心を示し、夕暮時の月もさしのぼる頃かいま見することになる。姫君とおぼしき女性は横を向いていたため、「髪のこぼれかかりたるは、まづうつくし」としか目に入らなかったものの、「四十あまりなる尼君、白き衣のなへばめるに、寄り臥して、絵の物語は見ゐたる」と記すため、夕暮れ時とはいえ、彼は年齢が判断できる程度には顔なども見えたようである。この尼君は、「中の柱に寄りゐて、脇息の上に経を置きて、いとなやましげに読みゐたる尼君、ただ人と見えず。四十余ばかりにて」とする、若紫の祖母尼君を念頭にしての描写であることは、すでに言及されている通りであろう。後に明らかになるのだが、しのびねの姫君の母が尼君であるため、「四十あまり」を四十二から四十五歳とし、姫君の年齢を十五から十八歳とすると、尼君は二十五から三十一歳ばかりの高齢出産となるため、古本では「尼君」は「母君」ではなく、「縁故ある老女」だったのを、改作本では実の母にしたのではないか[7]との解釈もある。光源氏は「夕暮のいたう霞みたる」折のかいま見とはいえ、尼君四十余、若紫は「十ばかり」との判断は、祖母

と孫との関係にはふさわしい年齢といえよう。それにくらべ、しのびねの姫君を十代半ばから後半とすると、確かに尼君が出産した年齢は高くなり、月明かりのもとでの中納言の見間違いとしないと、親子との設定は当時にあってはやや不自然な感じもしてくる。

俊蔭女が兼雅と出会ったのは十五歳、紫上の新枕は十四歳であってみれば、しのびねの姫君もほぼこれに近い年齢であったと想定されてくる。たとえば、冒頭での中納言のかいま見の折を十五歳とすると、物語二年目の十六歳で若君出産、十八歳で内大臣の策略により出奔して内侍の局に身を寄せ、帝の知るところとなり、十九歳で中納言の出家、二十歳で内侍、翌年春に若宮誕生にともない承香殿女御となる、といった年立を構成することになる。ただ、五年ずらして物語の始発が二十歳だったとしても、きんつねとの悲恋物語が前半に展開しているだけに、帝が姫君を見初めたのは二十三歳、若宮が生まれるのは二十六歳となり、少し年齢が高くなるとはいえ、それほど違和感はないようにも思う。これだと、母尼君が二十歳ばかりの姫君出産となり、物語の展開としては無難になってくるのではないだろうか。

物語も下巻の後半となり、クライマックスの一つとして描かれているのが、しのびねの姫君との間に生まれた若君が十二歳で少将から中将に昇進し、その暮に出家した父を探し求め、横川で再会するという場面である。入道中納言について、「聖、三十五になりたまへども、いと若く美しうおはせし名残に、やつれたまへども人にまぎるべくもみえたまはず」と描写されており、僧衣を身にしたやつれた姿ながら、中将にはすぐさま父と知ることができたという。父親にとっても、「むげに幼くて離れたてまつりしかば、定かならねども、ほのかに覚ゆる御面影の、明け暮れは恋しく、…凡夫の習ひの悲しさは、今まで知りたてまつらで、十年余りが間、ものを思ひはべりつることの悲しさよ」と、幼かった息子の面影を思い出し、山籠りするようになって「十年余り」の時の経過を回顧する。ただ、現存本の年立からすると、物語の五年目の二月にきんつねは出家し、その後の経過をたどると、中将の横川の訪れは七年目にあたるため、入道のことばとは矛盾が生じてしまう。といっても、ここは出家して「十年余り」とは述べていなく、その間「ものを思ひはべりつること」とするため、しのびねの姫君を知るようになってのこととすると、まさに十三年の歳月となる。それとともに、入道は現在三十五歳とするため、物語が語り始められたのは二十三歳となり、しのびねの姫君が十九か二十歳だと、先に述べた母親との年齢関係も破綻することなく構想されていたといえよう。

しのびねの姫君の母であり、尼君とも称される人物については、底本に用いた奈良絵本では三十回その名が言及さ

れるが、その呼称が巻の進むにしたがい少しずつ変化してくるのは注目される。「尼君」「尼上」といった呼び方から、「母君」となり、さらに「母上」へとする展開するのである。その実態を知るため、奈良絵本（大阪青山短期大学本）の出現順序に列記し、上巻・中巻・下巻の区分とともに、それぞれの丁数も示した。

尼君（上三ウ）	
尼君（上六ウ）	
尼上（上八オ）	
尼上（上九ウ）	
尼君（上一〇ウ）	
尼君（上一二オ）	母君（上一一ウ）
尼君（上一四オ）	
尼君（上一四ウ）	
尼上（上一五ウ）	
尼上（上一六オ）	
尼君（上一六ウ）	
尼君（上一六ウ）	母君（上一九ウ）
尼上（上二八ウ）	母君（上二五オ）
尼上（上三三オ）	母君（上二五ウ）
	母君（上二八オ）
	母君（上二八ウ）
尼上（中八オ）	祖母君（中二ウ）
尼上（中八ウ）	母なる人（中一六オ）
	母上（中一九ウ）
	母上（中二〇オ）
	母上（中二七オ）
	母上（中三三ウ）
	母上（下二三オ）
	母上（下二四オ）

これによって、上巻の前半は「尼君」ないしは「尼上」とする、出家者としての属性の呼び方が、後半になるにしたがい「母君」とする、母親としての表現が多くなり、しかも中巻から下巻にかけては「母上」とする呼称で統一されてくる。「君」よりも「上」と呼ぶ方が敬意の念が強いように、物語の進行にしたがい、しのびねの姫君の母親への待遇が高まり、すっかり尼であったことなど忘れられてしまうほどになる。内大臣の北の方、即ち中納言の母親も「母上」と呼ばれており、登場する十五回のうち、「母上」とされるのが十三回、「母君」は二回見いだす。「母君」とするうちの一回は中納言の会話に用いられ、地の文に「母君」とするのはわずかに一例にすぎないだけに、彼女は上中下巻を通じてほぼ一貫して「母上」と、尊崇される人物として造型されていたといえよう。しのびねの姫君の母親も、「尼」の属性が消失し、「母上」の待遇を受ける身となったのである。

若君が内大臣邸に引き取られることになり、迎えの車に

乳母とともに乗り込んで別れてしまった後、

姫君はそのまま倒れ臥しておはします。尼上も人目も知らず泣きたまふに、さらにしのぶべきここちせず。ややためらひて、母君、「あな心憂や、などさのみかくはおはするぞ。これも力なきこととおぼしなしたまへ。…」

と、母君が娘の姫君を慰める場面があるが、ここでは「尼上」とあり、すぐ続けて「母君」と呼び、あたかも別人が存在するような表現も見られる。しかし、尼上が「人目も知らず泣きたまふ」とひとしきり泣き、すこし心を落ちつけ、「ややためらひて」とする文脈からすると、明らかに同一人物の描写である。母が姫君を連れて行方知れずになってしまった後、母親と語る中納言のことばに、「母なる人も添ひてはべりつる」とするのによって、別人ではありえないことは明らかであろう。そうだとしても、尼上とされていた姿が、しきりに姫君の母親として主張され、やがて「母上」という敬称が用いられるようになったのは確かである。帝がしのびねの姫君を見初め、やがて内侍となるにともない、母親も「母君」ではなく、「母上」と呼ぶ必然性が生じたのだといえよう。

三　式部卿宮家の没落

中納言は小柴垣の屋敷からの琴の音に耳を傾けたものの、すぐさまかいま見の行動に出たわけではなく、月あかりの風情のあるたそがれに、人のいない簀の子に腰をおろし、しばらくぼんやりとながめていると、「いと艶なる匂ひかな」とのことばに、「姫君のかたに、御火取り召しつるまにこそあるらめ」との女房たちの会話が聞こえ、そこから「姫君など言ふは」と、その容姿を知りたく思ったことによる。玉鬘と鬚黒の娘である大君の紹介で、「姫君は、いとあざやかに、けだかう、今めかしきさましたまひて」（竹河）などとあるように、姫君のことばは高貴な家柄の娘を称するだけに、彼としては「さびしくあばれたらむ葎の門」ではないが、何か事情があってしばらく滞在している女性がいることを知り、興味を持つにいたったのである。美しい女性であり、しかも女房たちから「姫君」と呼ばれているとなると、この嵯峨が本来の住まいであるはずはなく、「かくて日数をもへば、もしかりそめに物忌みなどにこもりてたち返りなば、行方も知らでは、いかがすべからむ」との危惧により、彼はすぐさま随身に情報を集めさせる。このような場合は、いずれの物語でも不確かなことが常道だったようで、中納言の知り得たのも、「八月ばかりより忍びておはします。今年内は、かくて過ぐしたま

ふべきやうにうけたまはりはべる」といった程度にしかすぎなく、都から移り住むようになったのであろうか、姫君は嵯峨の地にすでに二カ月とどまっていると知るだけであった。

中納言は、姫君を「昨日今日見初め」てのことではなく、「年月おぼし初めたる」思いであるとうち明けるものの、尼上はそのような女性はいないと否定し、一方では彼を「今日明日都にめでののしられたまふ、大臣殿の四位の少将殿にやおはすらむ」と、その正体を見抜いてしまう。中納言がいかに都で評判の高い貴公子であるかを示すとともに、尼上が「夜目にもしるき」とすぐさま判じたというのは、顔などもどこかで見知っていたに違いなく、そうすると彼女は都を日常生活の場とし、高貴な人物の消息にも通じていたことを意味する。尼上は、「このふた月ばかり、もののけにわづらふことはべりて」との中納言へのことばにより、すでに得ていた随身からの情報通り、やはり嵯峨での滞在は二ヶ月と知られ、「物忌み」ではなかったようだが、ただ姫君が煩っていたような気配もないため、真偽のほどは明らかではない。ともかく、都に邸宅があり、この小倉の裾は仮住まいだったようである。

中巻にいたり、内大臣から追い出されるにいたった姫君は、「ただありし嵯峨に尼になりてこそ過ぐさまほしけれ」と嘆き、宮中で中納言の知るところとなると、「ありし嵯峨に御さまをもかへてあらむとのみ、泣きこがれたまふ」と、彼女にとっての嵯峨は、故郷のように懐かしい、悲しみを癒す隠れの場所でもあった。中納言は姫君を三条邸に引き取る予定で、その造営を急いでいたものの、当面の仮の住まいとして、十一月二、三日の吉日に「御乳母子の左中弁なる家」に迎え入れた。中納言の宮中での物忌みの間に、姫君たちは追い出されてしまうことになり、その折母の尼上は「いづくへ帰りおはせむ」と、引き払う屋敷のないことを憂い、思いついたのが典侍の局であった。都に邸宅があるのであれば、まずはそこに移るのが自然のなりゆきのはずだが、そのような思考はまったくしていない。

姫君たちは、嵯峨から直接中納言の用意した都の邸宅に入って四年目[8]、内大臣のもとから、「中将は、かしこに今しばしはべらむと申しつる。よも近きほどは参りはべらじとなむ。御つれづれなるべければ、いづかたへもたち出でてなぐさみたまへ」と退去の通告を受け、親子はそこから出て行かざるをえなくなる。自邸の存在の有無は明らかにされないまま、典侍を頼って宮中に赴き、やがて帝の知るところとなって中納言との破局へと展開することになる。

中納言は物忌みから解放され、すぐさま訪れてみたものの、すでに姫君たちの姿はなく、家主の左中弁は「ありし嵯峨にやおはすらむ。尋ねまゐらむとて文をたまひて」

と、まっさきに思い浮かぶのは仮住まいの嵯峨の屋敷である。「もののけにわづらふこと」によりて嵯峨に移り住んだはずだが、その二カ月前、姫君たちは一体どこに住んでいたのであろうか。このようにたどると、尼君の都の住まいはもはやなくなってしまい、八宮が宇治に隠棲していたように、彼女たちも嵯峨が残された唯一の場所になっていたのであろうか。内大臣から追われ、もとの嵯峨に帰ればすぐに見つけられる恐れもあり、またどのような難題を持ちかけられるか知られないとの思いから、当面はみつからない場所として、典侍の局が念頭に浮かんだにしても、都の自邸のことは一切触れられなく、その存在すら明らかにしようとはしない。

中納言は姫君の素姓を知ることなく、「いかにも、ただ人にはあらじ」と、身分の高い女性であろうと想像するものの、具体的に乳母に問いただすのは、いかにも悠長なことだが、若君の生まれた翌年の五月になってであった。彼女の語るところによると、

この母君は、故式部卿の宮の御子にておはしましし、かすかなるさまにておはせしを、中務の宮、忍びておはせてはべりしに、やがてこの君生まれたまひしを、いとかしづきたまふべき御心をきてのはべりしかども、いづれも失せたまひて、あとなくなりたまひしかば、いかがもてなしきこえむとおぼしわづらひつるを、

と、母君（尼上）は式部卿宮女、そこに中務宮が忍んで通い、生まれたのが姫君だというのである。中納言のかいま見は若紫巻の北山の場面を想起させたが、按察使大納言の娘に兵部卿宮が通って若紫が生まれたという系譜においても、両者は近似した関係にある。大納言は娘の入内を望みながら果たすことができず、「いかなる人のしわざにか」とするように、思いがけなくも兵部卿宮が通うようになってしまった。しのびねの姫君の誕生により、「いとかしづきたまふべき御心をきて」とするので、中務の宮も、祖父の式部卿宮も、その美しく成長する姿を見るにつけ、将来は入内させようとの心づもりがあったというのであろう。ところが、「いづれも失せたまひて」と、楽しみにしていた祖父も父の中務宮も、ともに夢の実現を果たせないまま、あえなくこの世を去ってしまったというのである。

中納言はこれを聞くと、「いづかたもの筋にて、かくけだかきところはたぐひなきぞかし」と思量するように、しのびねの姫君は皇族の血筋にあり、入内するにもふさわしい家柄ではあった。それにしては、「かすかなるさまにておはせしを」と、零落したさまに描かれてはいるが、姫君の入内に夢を託しながら、「いずれも」はかなくなったとするので、近年までは生存していたはずである。宇治の八宮がそうであったように、式部卿宮もすっかり世の中から

見捨てられ、宮家という矜持を持ちながら、親娘でひっそりとすごしていたのであろう。そこに、中務宮が忍んで通うようになり、生まれたしのびねの姫君を、父親は勿論、式部卿宮も入内させたいと望むようになったものと思われる。宇治十帖における蜻蛉式部卿家の没落、姫君の宮の君は従姉妹である明石中宮のもとに女房として参上するような悲劇は、当時としては珍しくなかったに違いない。式部卿宮にとって、姫君の美しい成長は、入内の夢を紡ぐようになり、やがてかつてのはなやかな宮家再興へと思い描くようになったのであろうが、それもはかなくついえさってしまった。すると、それなりの邸宅は存在したはずだが、父宮の没後荒廃するにまかせ、末摘花の常陸宮邸のようになってしまったことから、姫君と嵯峨の別邸に移ったという背景も想定できよう。母君は、中納言に姫君の病気故と糊塗して語ったものの、内実は落魄と悲しみに満ちた折でもあっただけに、中納言の申し出はむしろ救われるような思いだったはずである。

父式部卿宮と夫の中務宮とをあいついで失った母君としては、これから先「いかがもてなしきこえむ」と、姫君の扱いに苦慮しているところに、中納言との結びつきがあり、それはまるで「仏の御助け」のように映ったのだという。しかし、祖父と父宮との姫君への望みは入内であり、かがやかしい宮家の再現であってみれば、中納言の北の方に納まるのでは満足できることでもなかった。悲劇の訪れがありはしたものの、それがかなえられるという後半の展開は、宮家の遺志が実現する物語の構造として、早くから仕組まれていたのでもあろう。

四　内大臣家の悲運としのびねの姫君の栄花

中納言はしのびねの姫君のもとを絶え間なく訪れ、若君をいつくしむ幸せな思いにひたっている場面に、

ただ、心にかかることなくて、若君うち愛して、一期は暮らすべきものとおぼし定むるぞ、御もの思ひの種とあぢきなし。

と、語り手は将来の不穏なありようのことばをとどめる。やがて訪れる、二人が運命に翻弄される姿が予示されているのである。祖父と父宮にとって、姫君の入内は亡くなる直前まで執念のように抱き続けていたのであろうが、そのために中納言は結果として帝への橋渡しをするという、犠牲者としての役割を演じたといえよう。没落した宇治の八宮の姫君中君は、結婚可能であった薫とは結ばれなく、彼はむしろ仲介役を果たすという、なかば道化的な役割も賦与されるのだが、匂宮と一緒になることによって、将来の栄花を手中に収める運命が訪れる。物語には描かれなかったその後の展開としては、匂宮の東宮位、即位、それにと

もない中君は中宮、生まれた御子は東宮となるという、明石一族とパラレルな構造が読みとれてくる。そのありようを継承したのがしのびねの姫君であり、宮家の執念が乗り移ったように、中納言と結婚して子供まで生まれながら、その幸せな生活を犠牲にしてまでもの宮中入りであった。本人の意志はともかく、物語の構造としては、帝との間に御子の誕生、それにともない姫君は内侍から中宮へ、翌年皇子は東宮となり、九歳で即位し、中宮は女院となるという、これ以上望むべくもない栄花が訪れるのである。

物語の始発で「尼上」と紹介され、やがて「母君」とも呼ばれるようになった姫君の母親は、帝が典侍の局へ訪れるようになって後は、「母上」とだけ称されるようになったことはすでに述べたところである。姫君が帝とのかかわりを持つようになったため、母親に対してもそれなりの待遇表現がなされる必要が生じた結果であるにしても、中巻以降は尼としての属性はすっかり影をひそめてしまう。明石入道が、明石中宮腹に若宮の誕生したのを聞いて奥山に隠遁したように、「母上」もしのびねの内侍に御子の生まれたのを知り、ここで出家して「尼上」になったのではないであろうか。古本において、最終的に「尼上」と呼ばれていたのを、改作にあたってその呼称を初めから用いてしまい、途中から修正して「母君」ともしたものの、混在する結果となってしまった。上巻において、「尼君」と「尼上」が両用されるのは、このような背景が存していたように思う。

姫君が姿を隠してしまった後、中納言は左中弁の「ありし嵯峨にやおはすらむ」との進言に従い、文を書いて持たせるものの、その後積極的に居場所を探した気配はない。住吉の姫君を探して鞍馬などに赴き、やっと長谷寺で霊夢を得て住吉まで訪れる男君や、室町期物語にいくらもあるような、全国各地の名所を探し求める男主人公のような行動力は、中納言にはまったく欠けているといえよう。ただ泣きしおれ、食事も喉を通らないありさまで、姫君は自分の心変わりによると恨んでいるであろうとし、「いづくに、いかにしておはすらむ」と心配するものの、それ以上の対応はすることなく、かといって「たとひ、世を背くとも、いづくにありと知られでは、無量劫を経るとも、心の澄みはべることあらじ」と、出家には踏み切れないで苦悩する姿が描かれる。このように、早い段階で中納言に出家の意向が語られながら、姫君の行方を確認しない限り、心を澄ましての修行はできないと自らその先を遮断し、若君を見るにつけ「あはれ、よしなき道のほだしかな」と逡巡するうちに、帝のもとにいる姫君を発見し、悲劇を加速させてしまう結果になってしまう。悩んだ末の中納言の決断ではなく、姫君の出奔の後に、すぐさま彼は出家という進むべき道を模索していたともいえるようで、姫君の栄花と

男君の悲嘆による出離は、物語の基本構造になっていたのであろう。

典侍の局に身を寄せたものの、「日に添へて沈」む姫君の姿に、典侍は「などさのみかくはおぼし入るぞ」と同情の思いを寄せ、

中納言殿も、まことに御心ざし変はらずは、かやうのよすがありと知らせたまはぬことあらじに、尋ねこそしたまふらめ。ともかく、いぶせき移ろふかたの深きにこそはべらめ。さのみ、むつかしきとおぼし沈まで、ものなども見入れたまへ。

と、中納言はすでに心変わりをしてしまい、左大将の姫君を寵愛するようになったに違いないと、慰みのことばをかける。ここで注目されるのは、中納言がしのびねの姫君への思いが不変であるならば、「かやうのよすがありと知らせたまはぬことあらじに」とのことばで、彼に真剣に探し出す気があるのであれば、典侍という「よすが」の存在を知って訪れてくるはずで、それがないというのは心変わりした証拠だというのである。中納言は姫君の行方を探し、嵯峨にいないとなると、後は当然のことながら「よすが」としての典侍のもとに避難していると想到すべきで、それがないというのは彼の不誠実なあかしだと主張する。

母親が殿の強圧によって家から離れざるを得なくなった折、「いづくに帰りおはせむ」と行くあてのなさを嘆き、そこで思いついたのが、「まことや、内裏の典侍にてはべる者も、尼上のために親しくおはすれば」と、ここで「親しくおはする」という典侍の存在が初めて明らかにされる。母親と典侍はたんに「親し」い間柄かと思うと、「よすが」とも表現され、中納言は少し考えればこのような身近な者の存在がわかったはずだとするのにより、世の中に周知の縁者の関係にあったのであろう。後に、中納言は承香殿のかいま見により姫君の姿をみとめ、女房の中納言の君に「さてもいかなるしるべにて、これには渡らせたまひけるぞ」とするのによると、彼は母親と典侍との関係を知らなかったようで、これでは「かやうのよすがありと知らせたまはぬことあらじに」との非難も、空疎なことばになってしまう。中納言の君の、「母上の御よすがありて、この御局へ忍び入らせたまひてはべるを」との説明により、中納言は初めて二人のかかわりを知ったはずで、探しに訪れるべきだと言われたところで、彼には手のほどこしようがなかった。

姫君がいなくなった後の中納言は、二条の左大将邸に通うでもなく、母親のもとにはしばしば顔をのぞかせるものの、食事も「けしきばかり」で箸も置き、「いといたう痩せ青」んだ姿をしていた。「ありし人の御ゆくへはいまだ知らせたまひさぶらはぬか」との母親の問いかけに、彼は「尋ねはべることのなければ、いかに知りはべらむ」と、

嵯峨に探しに行かせただけで、あとはすっかり放棄してしまっていることを明らかにする。彼は姫君の姿を見失った時点で、すでに探し出すことはあきらめ、出家もできないまま、なりゆきに身をまかせているにすぎなく、後はひたすら再会と離別という運命の悲劇の訪れを待っている状態であった。『住吉物語』のように、あくまでも姫君を探し出し、再会して幸せと栄花をきわめるといった物語ではなく、男君の悲恋と出離という構造のもとにすでに仕組まれていたともいえよう。

物語の冒頭において、中納言きんつねと桐壺女御の二人が登場し、内大臣家の繁栄を支え、「とりどりにいとはなやかなる御覚え、やむごとなき御さまどもなり」と、今上帝の御代の栄花をもたらす存在として描かれていた。その中納言が出家という非常手段によって、将来を嘱望された臣下としての柱石の地位を去り、その犠牲のもとに入内したしのびねの姫君は、御子をもうけることによって中宮にまで登りつめる。それに対して、

失せたまひし中納言の御妹桐壺の御方こそ、「世にはかかる人もありける」と、上もおぼしめして、また並ぶ人なかりしが、

と、桐壺女御は中宮にもなれないまま凋落はいちじるしく、内大臣のよかれと思った左大将の姫君との婚姻は、二人の子供を失う結果となってしまった。内大臣は自らの手で中納言を出家に追いやり、そこから逃れ出た姫君が中宮になってしまい、桐壺女御は「おぼえぬ人にはかに出でて、かくおされぬること」と、すべてが裏目に出て臍をかむしかないありさまであった。

古本においても、後に二位の中納言になった若君が横川の父入道を訪れて再会するという、もっとも感動の昂揚した場面が存在していたのか、改作での付加なのかは知りようがない。現存本だと男主人公は「入道中納言」とありたいところだが、『風葉和歌集[9]』には「しのびねの中将」とし、出家前の呼称が用いられる。ただ、「世をそむかんとていささかたちよりて」とか、「ほいとげてのちおなじ人のもとにさしおかせける」との詞書を持つ歌があるため、出家しているのは確かで、このあたり今のところ判断のしようがない。あるいは、彼は望み通り俗世間を絶って山に籠り、出家の準備をしながら、それでも心引かれしのびねの中宮に、思いあまって歌をつかわしたところで終わっていたのかも知れないと想像する。

若君は、父中納言の後を受け継ぐように栄達の道を歩んでいったはずだが、それは内大臣の血筋とはいえ、女院となり母后となったしのびねの姫君の子供でもある。内大臣がかつて夢に描いていたような、桐壺女御の立后、皇子は天皇に即位し、中納言は重臣として政治的な権力を振るう、といった構図は、すっかりしのびねの姫君にとって代

わられたという展開になっていることを知るであろう。

注

(1) 以下、引用する本文は、私に校訂した大阪青山短期大学蔵奈良絵本（三冊）と、高山郷土館蔵奈良絵本（下巻欠の二冊本）とによる。桑原博史著『中世物語の基礎的研究』（昭和四四年、風間書房）の系統に従うと、これらの本文は第二系統に属する。なお、本文としては、ほかに小久保崇明・山田裕次編『対校しのびね物語』（昭和六〇年、和泉書院）、大槻修編『校本しのびね物語』（平成元年、和泉書院）も参照した。

(2) 広島平安文学研究会「訳注『しのびね物語』（上）」（「古代中世国文学」第4号、昭和五九年八月）

(3) 三谷栄一『物語文学史論』（新訂版昭和四〇年、有精堂）。なお、神野藤昭夫氏は、「古本を縮小梗概化したもの」ではなく、「質的にも作意を異にした改作関係」（『散逸した物語世界と物語史』一九九八年、若草書房）とする。なお、改作したこの作品について、小木喬氏は「古物語からお伽草子に移行していく途中の形を示す一典型」（『散逸物語の研究』昭和四八年、笠間書院）と評価する。私としては、古本はやはりある程度の長さを持った中編作品であり、時代の趣向に応じた読みやすい分量に縮小するため、前半とか、とりわけ後半などはかなりダイジェスト化が著しく、それにともなって内容もかなり書き換えられているのではないかと思う。

(4) 拙著『源氏物語論考』（昭和五六年、風間書房）所収「『このついで』の構想―作者論と読者論のこころみ―」

(5) この折の作品は、『金葉集』『経信集』『師実集』に見いだされる。

(6) これについての簡単な見通しは、「『無名草子』の当代物語評と『松浦宮物語』」（新編日本古典文学全集『松浦宮物語・無名草子』小学館「月報」一九九九年四月）に書いた。

(7) 後藤康文「『忍音物語』の「尼君」をめぐって」（「文献探究」第一三号、昭和五八年一二月）

(8) 年立は、大槻修編『蓬左文庫蔵しのびね物語』（昭和五三年、和泉書院）に付された資料を参照した。

(9) 『風葉和歌集』に残存する「しのびね」の三首の和歌は現存本には見あたらないが、古本と改作本との関係については、注3の小木喬著や大槻修著『中世王朝物語の研究』（平成五年、世界思想社）等で考証される。

（いい・はるき）